

世界の作文で学ぶ「今」

外国の子どもの作文に触れながら地球規模で課題を考えるNPO法人による出前授業「世界のお友だち」が今春から始まった。大阪市鶴見区の「みらくる」が作文を用意し、講師を派遣する。大阪は訪日外国人が過去最高を更新し、2025年には大阪・関西万博が控える。文化の異なる国の同世代の考えを通して子どもたちが独自の視点を育むユニークな取り組みだ。

【芝村侑美】

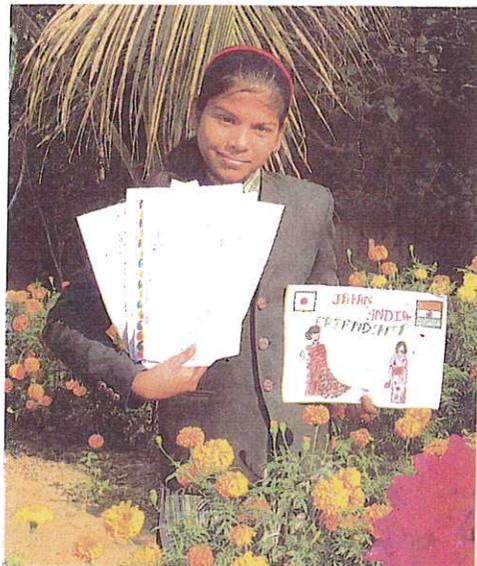
大阪のNPO 出前授業

「私の周りには、親と一緒に住めない子どもがとて多くいます。私は彼らにとても申し訳なく思います」。インド・オディシヤ州の少女、ウリティシャさん(12)の作文の一節だ。

4月16日、大阪市立十三小学校(同市淀川区)で、5年生対象に社会科や総合的な学習の時間として行われた。同法人理事の新井香恵さん(49)は、インドの地理や国旗を紹介、IT産業や農業が盛んな国だと説明し、作文を読み聞かせた。

作文には、両親が英語学校に通わせてくれたことや、苦しい家計ながら必要な物をそろえてくれたことへの感謝の気持ちとともに、「大きくなったら貧しい子どもたちが無料で勉強できるように学校を作りたい」と夢がこぼれていた。

作文に触れた日本の子どもは「親と暮らすのは当たり前かと思っていた」



①作文を書いたウリティシャさん＝NPO法人みらくる提供②インドに住む少女が書いた作文を聞く5年生の児童ら＝大阪府市立十三小学校で4月、芝村侑美撮影

子供の視点 同世代にリアル

と驚いた。何をすれば、少女と仲良くなるか。「手紙を送る」「お年玉とか食料をあげる」。いろいろな意見や提案があったが、新井さんは「相手のことを考えることが第一歩だよ」と語りかけた。

法人は今春設立され、勉強だけでなく、子どもたちに原体験をするきっかけ作りをしたいと考えた。同世代が書いた作文を読むことで、子どもたちが世界の課題を自分のこととして捉えられるきっかけにしたいと授業を考えた。

作文は、海外の現地で活動している別のNPO法人と連携、現地の子どもたちに書いてもらった。インドやバン格拉デシュなど東南アジアやアフリカを中心に、計8カ国の10〜12歳の子どもが書いた作文を授業の題材にする。

初めて海外の同世代の作文に触れ、同小の尾形心さん(10)は「誰かのために夢をかなえたいと思うことがすごい」。後藤琥太郎さん(11)は「作文だと考えが伝わってきて、分かりやすかった」と好評。担任の植村優子教諭(56)は「社会科で勉強することでもあり、世界のことを知るいいきっかけになった」と話していた。

授業は無料で、東京や北海道、福岡の小学校でも実施が決まっている。問い合わせは同法人理事長の吉村大作さん(090・69866・6233)まで。

MAINICHI
新聞
夕刊

5月9日(木)

2019年(令和元年)

発行所：大阪市北区梅田3丁目4番
〒530-8251 電話(06)6345-155
毎日新聞大阪本社

世界中のアイコトバ
MOTTAINAI
http://mottainai.info/
MOTTAINAI キャンペーン事務局 TEL 03-32

◇ 理不尽に過ぎる大津 子どもたちが巻き起こる事故が後を絶たぬ以外でも、安全に死策に限界」では済ま
◇ イラン、核合意履 停止を発表。米は新



事故現場 大津

中

通安

ワシントン 北京・赤間 米大統領は 州で演説し 無しにした 側に出方 対する追加

大阪日日新聞

4月21日(日)

2019年(平成31年)

発行所

新日本海新聞社
大阪本社

〒531-0061 大阪市北区中津6-7-1
電話(06)6454-1101(代表)
FAX(06)6454-1400

記事・情報提供は
編集(06)6454-7056
大阪の広告は
営業(06)6454-7058
鳥取・山陰地区の広告は
(06)6454-7055
配達・購読は
販売(06)6454-7057

朝刊
1部 **90円**
さらにお得な月極め1カ月
2,050円
(本体1,899円+消費税151円)
購読申込専用フリーダイヤル
☎0120-728-468

途上国の同世代 つづる言葉で 世界を知ろう

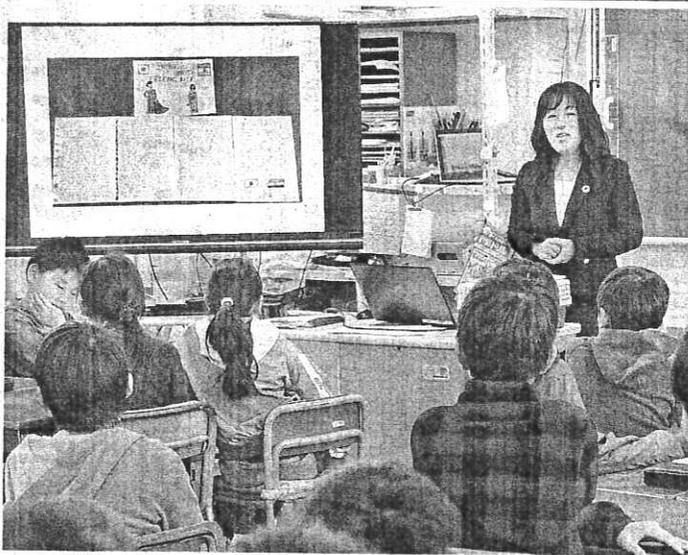
十三小で特別授業
作文読み話し合う

淀川区



途上国に住む子どもがつつつ

た作文を教材に、小学生の国際理解を進める特別授業「世界のお友だち〇」が、淀川区十三東の市立十三小(笹井督子校長)で行われた。12歳のインド人少女が自身の夢や両親への感謝、日本への憧れをつづった作文に児童たちは「優しさが伝わってきた」「日本に来た時は全力でおもてなしをした」と感想を話した。(光長いづみ)



ウリティシャさんの手紙をモニターに映し、インドの説明をする新井さん(右奥)

NPO法人みらくる(鶴見区、吉村大作理事長)が企画。「教師と児童の縦の関係ではなく、同世代の横の関係、同じ視点で話し掛けられることでその国を考えるきっかけになれば」(吉村理事長)と、同世代の等身大の言葉を通して国際理解を図るのが狙い。

授業は16日に実施され、5年生35人が参加。同法人の新井香恵さんが、インド人のウリティシャさん(12)の作文を紹介した。ウリティシャさんは、勉強を頑張っていること、貧しくて勉強をさせてくれる両親に感謝していること、周囲には両親と暮らす学校へ行けない子どもがたくさんいること、将来は

貧しい子どもたちが無料で通える学校を造りたいと書いていた。その後は、作文の感想や「仲良くなるために必要な事」「今からできる事」などをグループで話し合い、児童たちは「インドについて調べる」「日本の文化や遊びを伝える」と活発に発表。林絢音さん(10)は「外国の人でも思いやりを持って仲良くしたい」と笑顔を見せていた。

吉村理事長は「グローバル化は進んでいるが、個人の能力を高めることにとまっている。世界の課題を自分のことのように考える能力が必要で、授業ではそれができたと思う」と手応えを強調した。同法人では、アジアやアフリカの主に途上国8カ国に住む10歳から12歳の男女の書いた作文を用意。今後は東京都や北海道、島根県でも授業を実施する。